

令和4年秋 子ども図書館おすすめ本

★中高生におすすめの本★

★『さがしもの』

角田光代/作 新潮文庫



自分の手放した本に行く先々の古本屋で再会する不思議な話、「旅する本」。病床に臥しながら手に取った本のこれまでの持ち主に思いを馳せる「だれか」。旅館の部屋に置きっぱなしになっていた詩集に挟まっていた便箋を読む「手紙」。同棲相手と別れるので荷物を整理していると、本棚に同じ本が二冊並んでいたのに気が付いた「彼と私の本棚」など、本にまつわる九つの短編集。

『この本が、世界に存在することに』の改題本。

★『「また、必ず会おう」と誰もが言った。』

喜多川泰/作 サンマーク出版

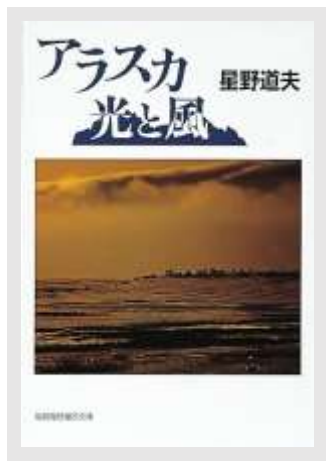


高校生の秋月和也は、ひよんなことからディズニーランドに行ったことがあると友人に嘘を吐いてしまう。証拠として写真を持ってくるように言われた和也は、夏休み、一人で東京に向かう事にした。楽しくもない旅行を終えたその帰り道、バスで空港に向かっていた和也は、渋滞にはまってしまう、帰りの飛行機に間に合わなくなってしまふ。所持金も少なく、泊まる当てもなく、途方に暮れていたところに、しかし一人のおばちゃんが声をかけてくれたのだった——。

旅の先々で出会う人々の、厳しさと温もりを感じる一冊。

★『アラスカ 光と風』

星野道夫/著・写真 福音館書店



18歳の頃、アラスカに興味を抱いていた星野道夫は、一冊の本に掲載されていた一枚の写真に惹かれ、アラスカにある小さなエスキモーの村へと手紙を出した。自分の事の他に、村の生活に興味があること、どんな仕事でもするのでどこかに泊まらせて欲しいことを書き添えて、返事を待つこと約半年。村長から奇跡的に返事があり、道夫の申し出に快く応じてくれるとの事だった。

かくして東京からアラスカへ旅に出た道夫は、自然の織り成す様々な景色に間近で触れる事になる————。写真家・星野道夫の原点が解る、旅行記風自伝的エッセイ。

